

アヘン戦争前夜のマカオに於ける英人居住についての一考察

アヘン戦争前夜のマカオに於ける英人居住についての一考察

MACAU & ENGLISHMEN BEFORE THE OPIUM WAR

宮 澤 眞 一

Miyazawa Shinichi

Macau, the last Portuguese settlement in Asia, saw English merchants gradually gaining an influence in the country trade of China during the long period of about 300 years between 1557 and 1842. This paper examines the process of the English affluence in Macau and Canton, focusing on those typical grievances of Englishmen against the Macau and the Chinese Governments which finally triggered the Opium War.

- I 居留地マカオの形成
- II マカオ居留地に割り込む英国商人
- III アヘン戦争に至る英人のトラブル
- IV H.M.S. Hyacinth 航海日誌とスタントン投獄事件

Appendix: A.A.de Silveira Pinto to Sir A.R.Johnson,
Macao, 10th August, 1840

Reference

居留地マカオの形成

ポルトガルによる東洋進出は、大航海を夢見るヘンリー王子（Prince Henry the Navigator）の熱心な支援を受け、1419/1420 年のマデイラ発見で開幕した。いったんはこうして華々しく始まりはしたものの、アフリカ西海岸の南下、希望峰の迂回、インド洋の航路発見に手間取ってしまい、ようやく 1498 年にヴァスコ・ダ・ガマが、インド西岸に到達したとき、すでに航海王子は他界して約 40 年が過ぎ去っていた。このように緩慢にして、それでいて着実に時を刻んで時代の歯車は回転した。

リスボンからのオリエント・ルートを陸路に頼らず、海路に求めた王子と庇護下の航海士仲間には、二つの神に奉仕したいとする使命感が認められた。Mammon と God である。地中海沿岸に勢力圏を伸長したアラブ・トルコのイスラム教徒を希望峰経由で迂回し包囲できれば、十字軍時代にヨーロッパ人が味を覚えたオリエント香料は、安全に安価に入手できるはずである。そうなれば、ヴェニス商人達の独占ルートは崩壊するから、Mammon とこれに仕えるポルトガル商人達の喜ぶ順番が来る。他方、未知の東洋の片隅に忘れられ、孤立して暮らしていると噂に聞きキリスト教徒の集団を発見し、イスラム教徒の手から救出できるならば、天上の神 God とこれに仕えるキリスト教徒達は喜ぶはずである。初期の発見航海の時代から掲げた宗教と交易というこれら二つの目的は、十六世紀の東洋各地で展開することになるポルトガル人の居留地形成の最中に、明暗する濃厚な対比を浸透させていった。マカオもその例外ではない。

ポルトガル人の住むアジア居留地の最初期形成は、1503 年、インド西南沿岸のコーチン（Cochin）で始まる。1509 年にイスラム教徒の連合艦隊を初代東洋総督アルメイダ（Dom Francisco de Almeida）がインド西岸（Diu）に撃破してからは、その後のポルトガルによる東洋貿易の本拠地となったゴアを占拠することで、飛躍的な拡張の時代を迎えた。数年後の 1511 年には、早くもマラッカをイスラム教徒の勢力圏から奪い、東南アジアにおけるポルトガルの拠点を確保した。同時に、東洋進出のための貿易と統治のシステムを確立していくのである。それによると、本国からは東洋総督（Viceroy）をゴアに派遣する。現地貿易港のマラッカには、キャピタン（Captain-Major / Captain-General）を任命して、極東と東南アジアの貿易を監督させた。後年の日本貿易を司るために、交易船団を組織し自ら乗り込むこのキャピタンは、マカオの滞在期間中、マカオの統治権までも委任されている。総督は国王の代理人であったが、キャピタンは総督の代理人である。

短い任期に限定されてはいるものの、現地で貿易と統治を監督する有力な権限が与えられていた。政治、外交、商業の三領域の混入する権限なのであるから、公然と私的な巨利を追求できる特典的なチャンスに発展した。

マラッカから中国南部に向けた初航海。これは、アルメイダとの間で総督ポストの争奪を争った二代総督アルバカーキ（Alfonso de Albuquerque）の指示によって、1513年に派遣されたキャピタンのアルバレス船長（Jorge Alvares）によって実現する。チャーターしたシャイム船には、現地人の水先案内人が乗り込んでいる。海図のない海域の航海に際し、常にポルトガル商船の採用してきた方法をここでも踏襲したわけである。広東の城内にこそ招き入れられなかったけれど、華南（マカオ・香港）の水域に入って停泊できた。断るまでもなく、このときが海路によって中国沿岸まで接近したヨーロッパ人の嚆矢である。その後、1517年、ポルトガルから正式な使節（Tome Pires）が中国に派遣された。同行したポルトガル人商人達には広東での一時的な居住も許されている。ところが、使節による通商条約の締結交渉となると、話は別であった。その後の同種の交渉と同じく、中国艦隊の砲撃を受けるなど、不運と失望と年月を重ねるばかりであって進展を見ていない。実際に、通商条約の締結は、アヘン戦争の直後になっても成立できず、なんと1880年代に立ち至ってしまう。治外法権（extraterritoriality）の認められていない外国人居住地、つまりは「居座り組」（squatters）である。その間マカオ市民には条約に定める法的な主権（sovereignty）が欠けている。そうでありながら三百年以上もの長いあいだ、存続し発展できた点で実に異色の国際都市と言えるであろう。

政府間に正規の通商外交関係はなくとも、マラッカ在住のポルトガル商人達は、交易船を仕立てては、意欲的に中国沿岸に進み出た。1520～1550年の30年ほどの間は、妨害を避けるために華南（マカオ・香港・広東）の海域を離れ、更に中国沿岸を北上してアモイやチューサンあたりまで進んだ。現地役人の黙認に助けられ、地元商人との交易が発達した。それでも海賊船と間違われるなど、争いごとは付きものである。実際、外交と法律の保護が欠落したままであるのだから、もっぱら Mammon に献身する目的だけを執拗に繰り返した密貿易という実態に変わりなかった。

中国における最初のヨーロッパ人居留地と言われる Liampo を1540年に手に入れているが、居留地とは名ばかりである。密貿易商人の隠れ家として便利な数軒の粗末な小屋が立っていたに過ぎなかったようである。日本発見もこの密貿易の最中に起きた偶然の出来事なのだ。チャーターした中国船によって Liampo へ向かう途中で漂流したモタ

(Antonio da Mota) 等三人のポルトガル人が、1542 年に沖縄、翌年に種子島へ漂着した。日本とも縁の深いマカオではあるけれど、この時点で未だ形成されておらず、更に 15 年ほど待たなければならなかった。

1544 年はポルトガル商人の「日本ゴールド・ラッシュ」に賑わった年と言われている。日本発見の報を受けたポルトガル商人達が、ゴアやマラッカから船団を組んで、続々と押しかけることになったためであるという。東洋紀行記のなかで 1542 年の日本発見を自慢気に魅惑的に語っているピント (Fernaο Mendes Pinto) にしても、1544 年のラッシュ時が彼の日本初航海であるはずとの説が定着してきている。そうなるとピントの仕えた神は、ザビエルの神から Mammon の方へと比重を傾けることになってしまい、重要な研究課題として今後の検討に残されている。

マカオ繁栄の基盤が日本貿易にあったことはしばしば指摘されてきた。広東で年に二回開催される市で中国産の絹を買いつけたマカオ商人が、九州各地の港に陸揚げしては、日本産の純度の高い銀や銅による支払いを受け、更にこれを海外で売るとき、二重三重の利益を生んだと言われている。ゴールド・ラッシュというよりも、「シルバー・ラッシュ」と呼んだ方が適切と思われる実態なのである。種子島の鉄砲伝来とほぼ時を同じくして、イエズス会宣教師のザビエル (Saint Francis Xavier) は東洋伝道の途についた。ポルトガル人でこそないものの、伝道の旅に先立ちポルトガル国王に面会したり、1541 年 4 月 7 日の出航にあたり、インド総督がリスボンからゴアまで同行した。ザビエルが日本に関し最初に耳にしたのが、1547 年 12 月のマラッカにおいてであり、アンジローの故郷、鹿兒島への到着は、1549 年 8 月 15 日になった。二年三ヶ月ほどの日本伝道の後、1551 年 11 月中旬に日本を去る。その後、ゴアとマラッカを訪れたザビエルは、終焉の地となるマカオ・香港海域の「聖ヨハネ島」(Saint John Island / Sanchao / Shang Chuan / Sanchuang / Sanchian / 上川島) に、1552 年 8 月末に上陸した。この時点になってもマカオが未だ形成を見ていないためである。

チューサンに近い Liampo に置かれたポルトガル商人の居留地は、ザビエルの日本滞在中に、すでにこの「聖ヨハネ島」へ移されていた。Liampo の壊滅が移転の直接原因なのである。福建省に 1547 年に着任した新しい知事の Chu Yuan は、なにを考えたものか、1549 年、同港に居住するポルトガル人を襲撃して、数人を投獄するという暴挙に出た。彼らの身柄の解放はマカオの形成された頃と言われ、異境の地に五年以上もつづいた幽閉の間、よく生きながらえたものである。前線基地を失ったポルトガル系の冒険商人達は、

再び広東に隣接して便利な華南に貿易の拠点を求めて、この小島に居住することになった。あまりに小さくて不毛の岩山であったせい、早くも 1553 年には、広東に一段と近い Lampacao (Langpakao / Lampakkau) へ再び居留地を移している。しかし、これはザビエルの死後に起きた。新ポルトガル人居留地の建物は、みな粗末な小屋であったけれど、密集しており 400 軒を越す勢いとなった。同地からは目と鼻の先の近距離に位置するマカオ (Macau / Macao / Amacon / Amacao / Amangao / Oumun / 澳門) への最終的なポルトガル人居留地の移動は、1555 年から 1557 年の時期に起きている。左右に良好な湾 (the Inner Harbour & the Outer Harbour) を持つマカオの地形的魅力が、主要な誘因であったと言われた。

広大な中国大陸の地図、それも中国南部に限定して眺めても、そこにマカオの位置を見つけるのはときに容易でない。マカオは小指の先のように、水面に少し突き出しただけの半島にすぎない。或る人は半島の形を蓮華の蕾にたとえた。半島の先端から本土との境界門の城壁まで、その長さは四マイルほどであって、左右の湾の間で一番狭まった陸地、つまり半島の巾は、一マイルに満たない。一日で歩き廻れる狭い場所だ。この細長く狭い国際都市は、第 2 次世界大戦下に、日本軍による包囲を受けながらも中立を死守した。膨れ上がる避難民を受け入れ、約五十万人の人口が日々の生活に苦闘した時期もあった。

内外どこの地域の歴史にも、そこに最初に足跡を残した人物の名前が郷土史に語りつがれるものである。本来であれば、ザビエルの名前がそれに最もふさわしいはずでありながら、前述した事情から別の人物になった。前出のピント。彼の東洋紀行記はこのところ信憑性を失ってきていると上に述べたばかりであるが、1555 年 11 月 20 日にマカオの発信、と記した彼の書簡の中で、“today I arrived in Amaquoa having come from Lampacau, the port where we were before” (Cesar Guillen-Nunez: p.6) と述べており、最初にマカオの名前を西洋の記録に登場させた栄誉だけは、疑問の余地がなさそうである。

マカオの歴史に関する研究は、スウェーデン人の Andrew Ljungstedt による『中国におけるポルトガル居留地に関する歴史的素描』(1838 年ボストン刊) に始まると言われながら、その後、19 世紀の間に進展せず、今世紀に入ってから Charles Boxter、J.M.Braga、Montalto de Jesus、Austin Coats、Maurice Collis、Lindsay Ride、Francisco Luiz Gomes、Father P. Manuel Teixeira、B. Basto da Silva、Cesar Guillen Nunez、Rosmarie Wank-Nolasco Lamas 等のマカオ史調査の成果が続々と発表され、「マカオの過去は徐々に秘密を解き明かされるようになった」(Coats: Macao

Narrative, p.108)

Boxter や Coats をはじめとするマカオ歴史家が一致して述べている点は、マカオ居留地の形成の発端が 1557 年であり、当時、中国南部の沿岸に出没した琉球・九州の海賊船を撃退したポルトガル船団の優れた西洋砲が契機になったという。中国南部に最大の商業都市として栄えていた広東を防衛するのに、ポルトガル人の居留地と砲台を河口のマカオに設けることは、中国側にとって一石二鳥の得策と思われたらしい。明朝と日本との間の交易が 1480 年以來禁じられていたから、ポルトガル商人による日本との代理貿易は、広東を潤してくれるはずであるとも計算された。利潤追求の目的は双方に忘れられていない。それでも前述したように、中国側は正式な通商条約の締結を頑に拒みつづける。国際法による正式な取り決めのないままに、外国の一角で暮らそうというのであるから、主権のない無法な「居座り」に違いないのである。いつ追い出されても仕方がない立場である。マカオの居留地生活は、法的な保護のないままに、時の中国官吏の政策に翻弄される危険を常に孕んでいた。こうした発足以来の危うい生活基盤こそ、今日まで人々を魅惑してやまないマカオの秘密の萌芽する温床にほかならず、ボーニン・アイランドと同様に、わたしたちの身近に不思議な街が実在していたものである。

1557 年の発足から 1999 年 12 月 20 日返還までの約 450 年にわたって存続できた要因の一つとして、ポルトガル人と中国人との現実的な融合政策を指摘しなければならない。現実には、ただでさえ海外進出が盛んで、青年男子の少ないポルトガル本土からは、大勢の独身男性をマカオに送り込むわけにいかず、またポルトガル女性のマカオ在住は厳禁されていたから、最初期の結婚相手は日本女性やマレイ人女性となった。その後、中国女性との結婚が奨励されて、中国系ポルトガル人の二世三世を増加させようとする融合政策が早くから採用された。彼ら混血のマカオ人はカトリック系ヨーロッパ人の司教・宣教師・神父・修道女の薫陶を受けて、中国住民とは異なる居留地特有の市民層を形成したことから、ポルトガルらしいアイデンティティを保持するのに有効な働きがあった。

マカオ居留地に割り込む英国商人

マカオ郊外に地元の中国上級官吏が住むマンダリン屋敷 (Casa Branca) それにマカオの街に下役官吏の役所と中国税関を置き、1573 年に本土との境界門 (barrier) を構築

して、中国側はマカオ市民生活を嫉妬深くコントロールしつづけた。法的な根拠のない居座り組であるのだから、「砲艦外交」に訴えることも出来ず、自ら努めて中国官吏と協調して相互の利益関係を積み重ねていく。妥協と融合の経験だけが頼りとなった。中国側に対して頻繁に繰り返される贈答（sing-songs）や賄賂。これが慣習化したばかりか、いったん不和が生じたりでもしたら、境界門は嚴重に閉じられ中国人の使用人をみな撤退させての兵糧攻め、それに加えて恐喝・暗殺、不法逮捕・監禁・処刑等も中国側の常套手段となった。天子の国の一隅に「置いていただいている」という不平等な関係は、ポルトガル政府やマカオ市民の手によって打破されていない。砲艦外交に訴えた英国政府によってこれが実現して、1842年の天津条約締結を实らせた。

中国政府の動向に一方で左右されながら、他方、ポルトガルの本国政府に対するマカオ市民の関係となると、前者に逆比例するかのよう独立と自治の度合いが強いのである。マカオ創設の時点から、現地のポルトガル商人達としては、本国政府の仲介を受けずに、独力でこの街を構築したという自信に満ちていた。言及したように、ゴアやマラッカの総督、更に現地マカオのキャピタンという監督統治のシステムによって、本国の王室と政府の影響力からは無縁でありえないが、市民の中より選ばれた三人の理事による市政運営の制度（The Senate）が早くから発達した。これがマカオ市民の独立自治の精神に裏打ちされ有効に働いたことも事実である。

マカオはポルトガル領と言えず、ポルトガル人女性の居住も他のヨーロッパ人男女の居住も中国側は最初から禁じた。オースティン・コーツのマカオ小説『禁じられた都市』の中で描かれているように、ヨーロッパ系の女性と言えば例外的に修道女の独身居住が黙認されているばかりである。1842年以前にマカオに単独で在住したい英人の独身貿易商などは、広東駐在の他国（商人）領事の肩書を使ったり、マカオに既存するポルトガル商社の名義貸しを隠れ蓑とした。これらは例外的な黙認事項であって、マカオ市民はあくまでもポルトガル系の独身者を主体に構成されていた。中国の政令発布によって、正式に広東の開港された1685年からは、年に二回開催される絹の市の期間、つまり半年間を広東の商館に滞在して商取引に専念したあとは、マカオ市民のポルトガル系商人のみならず、フランス人や英人の商人も、マカオで残りの半年を過ごす習慣が出来上がる。前出コーツの小説は英国東インド会社の独身マカオ駐在員を主人公に、マカオ生まれの中国女性との禁じられた結婚をテーマに取り上げて、広東とマカオの悲劇的な生活模様を巧みに再現できている。

中国政府にとっては中国領土、ポルトガル商人の目にはポルトガル系の自治都市、というマカオに伝統的な意識が二つ介在しているなかに、他の欧米諸国の独身男性が割り込んで居住するとき、相当の困難を伴って始まった。いずれも前述した広東貿易に関連しての便宜的な滞在・居住の黙認処置に違いない。それでも英国東インド会社の関係者であれば、マカオに広大な東インド会社の屋敷を構えるなど、滞在・居住に支障はなかった。19 世紀の初頭になっても東インド会社の関係者以外の英人が、交易活動以外の目的のために、広東に滞在するとかマカオに居住することに、大きな不安があった。一例はロンドン宣教師会派遣のロバート・モリソン (Robert Morrison) である。

モリソンの出発に先立って渡されたロンドン宣教師会の正式な 1807 年 1 月 20 日付け業務指示書には、「貴君の大きな目的である中国語の習得が達成されるまでの間、広東に滞在することに反対は出ないものと信じております」と書かれてあった。しかし、実際には、英国東インド会社関係者の目に招かれざる新教徒の渡来者のように映る不安を極度に恐れ、モリソンは身分を隠すためにわざわざアメリカ経由で中国渡航を果たしているだけでなく、米国 (商人) 領事カリントンや米国商館員ミルナーの世話を受けられるように紹介状の準備までしている。

当時の英人のなかで最も中国語に堪能で中国事情に明るいと言われていた人物は、東インド会社の通訳翻訳官ジョージ・T・ストーントン (Sir George T. Staunton) であったが、マカオ到着と同時に面会したモリソンに対して、ストーントンは中国語独学という大胆な目的に協力を惜しまないものの、「交易以外の目的で (広東に) 滞在することを東インド会社が許さないであろう」と述べて、更に「マカオでの居住は、カトリック教会の司教や神父の嫉妬故に、特に難しいであろう」と忠告しているほどである。従って 1807 年 9 月 7 日に広東に到着してから、1834 年 8 月 1 日に広東で客死するまでの間に、モリソンの周辺に限定するかぎり、広東とマカオの状況が大きく改善されている。象徴的な出来事としてここで指摘すべきは、モリソン夫人に関連する次のような事柄である。数少ない西洋女性の一人としてマカオ居住を黙認されている。そればかりでなく、カトリック教会とポルトガル系商人の支配的なマカオの地に、彼女を最初の埋葬者とする新教徒専用の墓地が新設される動きを作り出した。いずれもモリソン自身の偉業に対する各方面の好意的な評価が結晶しての成果と言えるであろう。前出ストーントンの好意を受けて、東インド会社の通訳翻訳官の仕事を引き継いだモリソンは、雑事に忙殺される日課のなかにも、中国語の集中的な習得につづき、聖書の中国語完訳と刊行を成功させていた

めた。

マカオに現れた最初の英人は、スコットランド出身の William Carmichael と言われている (Coats: Macao Narrative, pp.63-4)。1579 年に国を出てから、リスボン経由で東洋に向かう。1581 年にゴアに到着、その後の数年をマカオで過ごし、1626 年にロンドンの貧民院で死亡した。他方、最初の英国女性の登場は、ポルトガル経由でなかっただけに、悲劇的に終始したようである。東インド会社の前身である「イースト・インディーズと交易するロンドン商人の会社」(The Company と省略する) は、1600 年 12 月 31 日に設立の王室特許を得ているが、平戸商館の閉鎖される以前の 1620 年に、船大工の英人 Richard Frosbisher の一家を日本へ送りだしたことがある。ところが、船大工一家だけを乗せた小さな帆船は、マカオの近海まで来て座礁。英国から同伴してきた二人の女性、夫人 Joan とメイドの Judith が、ポルトガル当局に逮捕されはしたものの、最初の英国女性としてマカオに上陸して足跡を残すことになった。なかでもメイドは年若いこともあって、同情したカトリック神父の仲介によって、カトリックに改宗した後にマカオの女子孤児院で育った。船大工の夫の方はマラッカに連行された上で処刑され、その妻は二人のポルトガル女性との人質交換の成立によって、1625 年にジャワ島の英国系基地へ渡った。その後、再婚してロンドンへ戻ったと前出コーツは述べている。

こうした初期の英人の扱い方に始まってモリソンの時期に至るまでに、英人のマカオ居住を制約するものとしては、条約による人権と財産保護の欠落、中国官吏による不断の強圧と課税、ポルトガル系商人の利権と特権意識、カトリック神父による警戒心と妨害、本国政府同士の間で起きる政治・軍事的対立の余波、これらの要因を指摘できるであろう。英国東インド会社による広東交易が本格化して、広東滞在とマカオ居住という季節パターンが成立する契機は、前に言及した中国貿易港の開港である。開明的な皇帝 (K'ang Hi) が、イエズス会派遣の学者神父 Matteo Ricchi や Ferdinand Verbiest を北京に居住させ、進んで西洋の数学・天文学・絵画などを教えさせただけでなく、1685 年に開港を宣言し、同時に八ヶ条の規則 (Eight Regulations) を発令した。そこでは、武器の持ち込みを禁じ、永住権を与えず、買辦制度の導入や西洋婦人の滞在禁止等を規定した。他の開港地と違い、マカオに特有する長い歴史的な融合政策の故に、こうした中国側の規制を少しでも逃れるのに、この小さな町は有効であり、「中国の国内の小さなヨーロッパ」という特異な性格を形成していくことになる。

アヘン戦争に至る英人のトラブル

英国東インド会社の前身 The Company が発足してから約 100 年経過するまでの期間、英国の対中国貿易はアモイを中心に断続的に密貿易を繰り返していたに過ぎない。1685 年に中国諸港の開港宣言が公布されたものの、東インド会社の商船による定期的な交易の開始は、更に 10 年余り遅れて 1699 年の Macclesfield 号の派遣からになった。その後の 100 年間、つまり 18 世紀の間は毎年定期的に広東、マモイ、フチャー、ニンポに向けて商船を送り出していく。なかでも広東である。英国のみならず、オランダ、スペイン、デンマーク、スウェーデン、フランス、アメリカ等の欧米諸国の貿易商は、好んで交易に訪れるようになり、それだけに税関や中国官吏の規制に対する不満も集中しがちな場所となった。広東人の気質も影響して、トラブルが頻発した。1719 年、開港宣言の勇断を下した皇帝もその晩年になると、中国の貿易港は一港に絞る、それもマカオにしたらよい、という予期しない提案を行っているが、これも各地で起きたトラブルに失望し、将来を憂慮したためであろう。

英国東インド会社の中国貿易は 18 世紀の間に、他の欧米諸国を圧倒する勢いで進展した。18 世紀の後半には広東に毎年入港する英国系船舶は、欧米諸国のそれをすべて合計したものの倍以上の数に達した。商船数は言うまでもなく、肥大化する一方の英国東インド会社の貿易量と経済力を如実に物語っている。マカオ総督の公邸に隣接しては、それよりも広大で豪華な商館屋敷を 1773 年に構えた。遅れて参画したマカオ割り込み組でありながら、英国は事実上のマカオ主人という顔となる。

このように巨大化した英国資本とその収益は、1729 年に禁じられたはずのアヘン持ち込みに次第に傾斜していく悲劇構造を生み出し、19 世紀に入ってアヘン貿易に一段と拍車がかかった。こうした変則的な貿易形態こそ、英人に絡むトラブル、ひいては砲艦外交を引き起こす根底の原因である。広東・マカオ・香港の海域を舞台に実に様々なトラブルが積み重なり、ついにアヘン戦争で爆発したと見ることができるであろう。

英国外交文書を保管する英国公文書館には、アヘン戦争に至る 1835 年から 1840 年のマカオ通信が山積している。それらを閲覧していくと、寄せては返す波のように、1557 年の居留地形成以来、あまり事情の変わることはない古くて新たらしい問題が、たえず生起していることに気づく。ことに 1835 年は事件の多い一年であつたらしい。英国籍の商船 Eliza 号の難破に始まり、貨物船の Troughton 号などは海賊に襲撃され 5000 ドルの

略奪を受けたので、通訳としてモリソン博士の息子が中国政府と間で事後処理を交渉した。

また、1835 年 1 月 29 日に起きた商船 Argyle 号に絡む事件では、通訳にあたったチャールス・ギュツラフ (Charles Gutzlaff) の事後報告書が残されている。ベンガルからマカオに向かって進んで来た同船は、マカオ入港にあたって現地の水先案内人を求めてポートを出した。従来から接岸の許された前出「聖ヨハネ島」に上陸したつもりであった。ところが、そこは Ma-wei-chow であったので、上陸した 12 人の英人が逮捕される不運に陥る。本船 Argyle 号では、帰艦しない船員の安否を心配するあまり、島の「悪党」に誘拐されて、身代金 300 ドルを要求されたものと思い込んでしまう。マカオ在住の英国貿易監督官は、相談を受けるとともに、救出のために武装船の派遣を次のように助言した。

“You will consider yourself authorized upon their behalf to conclude an arrangement for the taking of two or three vessels adequately manned and equipped to proceed to the place where the people were seized.”

このような英国側の思い込みや先走りした言いがかりは、巨大資本の論理にほかならない。一步処置に狂ってしまえば、戦争の火種となる。アヘン戦争の前夜に多発した大小様々なトラブルの検証は、強大化した英国側の苛立ちや疑惑を明らかにするものと思われる。それに次第に強引となり、傲慢になっていく姿勢も、事件の背後から顔を覗かせている。その点で次に触れる James Innes の事件は象徴的な出来事と言える。

1835 年 8 月 12 日付で James Innes は、英国貿易監督官の Sir George B. Robinson 宛に、船荷没取事件の経過説明と今後の行動計画を知らせた。スコットランドの Durriss に在住する John Innes の長男であるこのジェームスは、1834 年 12 月中に、マカオの中国税関において起きたグラスゴー製の綿商品 22 箱とバーミンガム製雑貨 5 箱の没収を先ず報告する。これまで私的に広東の中国人官吏と交渉したり、またマカオ市当局や英国貿易監督官に仲介してもらい、不当に没収されたままの委託商品を取り戻そうとしたが、解決に至っていない。委託されてマニラで販売する予定であったものが、マカオで没収されるというのは不当極まりなく、これら輸入品に対する代金の支払い期限も迫っていた。解決のために自ら武装船を仕立て、武力を持ってしても、中国政府から取り戻すつもりである、と没収から半年余り経過した 1835 年 7 月に英国貿易監督官にすでに告げてあった (“wage war with the Chinese Government”)。自由貿易をさかんに標榜するようになってきた英国商人らしい独立心の現れであろうが、窮地に立たされてしまうのは、英国貿易監督官であった。後に本国政府に報告したなかに「無法な意図」(lawless intentions) と

いう批判が見える。それだけでないのである。私的な武装行動を阻止するために、同監督官は 1835 年 7 月 24 日には軍艦 Raleigh 号 (Quinn 船長、乗組み員 190 名、20 砲門) をマカオ内港に入港させてしまった。今度はマカオ総督が抗議する番である。ポルトガル以外の外国軍艦はマカオ港への入港を禁じられていたからである。James Innes の事件は、現地の貿易監督官にいくつかの教訓を与えたようである。一つには制約の多すぎるマカオ居留地に代わる英国系の中継地が欲しい。このことは、本国政府宛 1835 年 2 月 21 日付の同年第一号書簡に、Edwards の現地報告を受けて、ポーニン・アイランド (小笠原列島) を候補地の一つとして提案していることにも表わされていた。二つ目には、現地監督官の司法権についての提案である。多発する英国商人の乱暴な事件を監督防止するためには、現地の監督官に裁判と懲罰の司法権を与えるように、と外務大臣宛書簡 (1836 年 5 月 28 日付) で伝えるまでに発展した。このような一連の動きが誘因となって、やがて 1841 年 1 月 25 日月曜日の調査隊上陸、翌日の英国艦隊による香港占領を導いたと言えるであろう。

乱暴な事件の種類の一つに、英国商船の乗組み員による反乱がある。1835 年中にはこうした騒ぎ (insubordination) が多く見られたが、更に 1836 年前半だけでも同様の “the display of the like mutinous spirit” が多発しており、7 月 17 日から 19 日までの僅かな期間に、三隻もの英国商船 (Donna Darmelita, Lady Clifford, Solway) で起きた。現地の英国貿易監督官に取り締まりと懲罰の権限を強化して欲しい、という内容の書簡が、前出の James Innes によって現地貿易商の立場から書かれているのも、皮肉に満ちた事の成り行きと言える。

1837 年 3 月 13 日には、英国商船の Blake 号において、乗組み員の虐待事件が起きているとの急報が貿易監督官に届いた。近くにいたボートの英人目撃者の通報によれば、年若い甲板少年がマストに逆さまに吊るされる体罰を受けているという。いくら反抗的な乗組み員が増えている昨今とは言っても、人道的に見てあまりに行き過ぎていないか、という抗議のコメントが含まれていた。そこで急行して調べてみれば、この少年は 1835 年にリヴァプールでボートを盗み出した少年窃盗団の一味であって、発覚を恐れボンベイまで密航してきたところを Blake 号の船長 Thompson に救われたという経緯が判明した。現地貿易監督官の取り締まりと処罰を強化する提案に、もう一つの材料を提供することになった事件である。また、憶測・早とちり・疑惑に満ちた居留地の生活不安を暗示する出来事でもある。

このような混乱した生活のなかに、英人についての明るい健全なニュースがないわけではない。モリソンの評判についてはすでに触れた。1838 年 5 月 16 日付のポルトガル語書簡に、英人医師 Thomas Richardson Colledge の貢献に謝意を表明して、署名したマカオのポルトガル系市民約 50 名の名前が見える。しかし、1838 年 10 月 2 日付の書簡には、再発した乗組み員の反乱事件（John Bull 号）が報告されている。船内の待遇問題がなかなか改善されない以上、根絶できない性格の反復と言える。

H.M.S. Hyacinth 航海日誌とスタントン投獄事件

東インド会社による中国貿易の独占体制を 1834 年に解体させた英国政府は、政府の公的代表として三人の中国貿易監督官を任命した。初代の首席監督官ナピア（Lord Napier）は夫人と二人の娘を伴い、同年 7 月に本拠地のマカオに着任した。次席監督官のデイビス（John Francis Davis）、それに三等監督官のロビンソン（Sir George Robinson）、更に英国艦隊の司令官エリオット（Captain Charles Elliot）の三人は、それぞれ任期の終えた前任者の職位を受け継いでいるので、数年の後にアヘン戦争の戦闘が始まるころには、首席監督官はエリオットの順番になった。英国政府の総括的現地出先機関であるから、外交、軍事、貿易、司法の分野にわたって英人の監督保護に当たった。

1839 年 11 月 3 日の正午頃である。首席監督官エリオットの事前指示にもとづき、二隻の英国軍艦（Hyacinth, Voltage）は、広東に接近する Bocca Tigris まで侵攻し、集結中の中国艦隊に向けて史上初の砲弾を浴びせかけた。文字通りアヘン戦争の始まりとなった。

この砲撃事件の勃発した当時、緊張の高まる中国海域に配備されていた英国軍艦は次に挙げる七隻であった。Hyacinth 号（艦長 William Warren）、Voltage 号（艦長 H.Smith）、Druid 号（艦長 Lord John Spencer Churchill）、Larne 号（艦長 Blake）、その他小型ブリッグ船（Reliance, Trusty, Magistrate）。英国公文書館に保管されている英国軍艦ヒアシンズ号の航海日誌に沿ってこの砲撃事件を再現してみるかぎり、オースチン・コーツの述べている事件経過に若干の事実誤認を指摘しなければならないようである。英国の母港は Portsmouth であったが、1835 年前半にニュージーランドから太平洋を北上して、1835 年 10 月 2 日にバタビア到着、その後シンガポール、カルカッタ、ボンベ

イに寄港しただけで華南に一度も立ち寄らずに、希望峰経由によって母港へ 1836 年 11 月 22 日に戻っている。そこで新艦長に就任したヤーレンは、約一年後の 1837 年 11 月 15 日に母港を出航し、任地の東南アジア海域に向かった。シンガポール港への到着までに約半年を費やし、1838 年 5 月 29 日火曜日に入港した。それから約一年半の間、シンガポール、マラッラの海域を巡行していたのが、中国情勢の緊迫によって新たな任務の指示を受けて、1839 年 10 月 4 日日曜日午後 12 時 15 分には香港の沖合に達している。航海日誌を読む面白さは、例えば、他の軍艦や商船の動向を伝えるところにある。この日、香港沖合（Hong Kong Roads）に英国軍艦としてヴォルテージ号が一隻だけ停泊しているのに、欧米諸国の商船は四十隻を数えた。

問題はこれら数多い船舶のなかに、アヘン貿易に係わる商船や、海上倉庫の役割を演ずる老巧船が相当数含まれていたことにある。なかには無謀な行動に出るアヘン船がいるものである。上で言及したコーツの事実誤認は、マカオ沖に停泊中のヒアシンス号 1839 年 10 月末の記述と関連している。10 月 28 日に前出ヴォルテージ号が近くに来て投錨した。翌日の午前 9 時半に、それまで近くで停泊していた英国商船 Royal Saxon 号が、北上を開始して、危険地域の広東に接近する気配を見せるので、ヴォルテージ号と共同の追跡が始まった。午後 12 時半に Royal Saxon 号の停泊を命じると同時に、貿易監督官からの通達を伝えて、アヘン取引のための広東接近を厳しく禁じた。それでも Royal Saxon 号は英国軍艦の命令に従わず、二隻の軍艦による追跡劇は激化してしまう。このとき二十五隻の軍艦で構成された中国艦隊の方では、英国軍艦と商船の間で繰り広げられる騒ぎを理解できずに、禁じられた海域に入り込んでしまった英国軍艦に対する警戒を強める結果に発展した。前述したように 11 月 3 日午後 12 時 10 分、ついに英国軍艦二隻と中国艦隊との間に砲撃戦が始まった。英国側の砲撃は午後 1 時 25 分に終わっているので、わずか一時間の交戦にすぎないものの、従来から禁じられていたマカオ内港への潜入をヒアシンス号は断行している。

中国と英国双方の間に相互信頼の基盤がないから、このように自国の無法商船を処罰する目的で追跡する英国軍艦が、軍艦の立ち入り禁止地帯まで入り込んでしまったために、中国艦隊との間に交戦の口実を与えてしまった。二隻の英国軍艦は中国艦隊を相手に戦闘する意図を最初から持っていたわけでない。すでに触れたように早とちりや疑惑が、今回の戦闘にいったん発展してしまえば、もはや両国間の戦争は避けられない事態となる。

すでに 1839 年末までに中国艦隊との間に交戦を交えた際に、マカオ内港に潜入したヒ

アシンス号は、1840年2月4日に二度目の入港を、更に1840年7月19日日曜日から7月31日金曜日までの間、三度目のマカオ停泊を余儀なくされた。二度目のときは、英人の首に賞金をかける、例えば首席監督官エリオットの首に5000ドル、という脅迫的告示の非常手段に訴えてでもマカオ居住の英人を追い出したい中国政府に対抗するための英人救出が目的であった。マカオ総督の厳重な抗議を受けながらも、そこには不当入港を正当化できる人道的な根拠があった。それが明らかに軍事目的と判断できる入港の場合には、マカオの湾内が砲撃戦の場面になりかねない。中立の立場に立たされたマカオ当局にとって、歓迎できないものとなる。三度目の入港の場合には、1840年7月末までによりやくマカオ港を離れて沖合に出たヒアシンス号は、ほかの四隻の英国軍艦（Druid, Columbine, Kimrod, Pinace）と艦隊を組み、中国国籍の大型塩運搬船四隻を拿捕・沈没させる目的で追跡して、1840年8月6日午後5時に砲撃を開始した。このような交戦下であって緊張の一段と高まったはずのマカオ沖合で、今度は、予期しない長閑な事件が別のところで勃発していた。スタントンの投獄事件である。

英国次席貿易監督官（Deputy Superintendent）のジョンソン（A.R.Johnson）が、スタントンの消息不明についてマカオ総督ピント（Adriao Accacio de Silveira Pinto）に連絡した第一報には、1840年8月8日の日付がある。若い宣教師の英人スタントンは、マカオの自宅を8月6日早朝4時にボートで水泳に出たまま帰宅しておらず、英人暗殺を勧める公示も発表されている折りから、安否が気づかわれていると切り出している。また、首席貿易監督官（Superintendent）エリオットの1840年6月23日付書簡に対するマカオ総督ピントの回答に言及して、交戦下の英国と中国の間であって中立路線を守るという総督の基本方針が一方にありながらも、他方、マカオに於ける「英人の身の安全を確保するための対策も取られてきていないことも同時に明白である」（“it appears that a state of strict neutrality is intended to be maintained on the part of your Excellency: But ‘it is as plain that effectual measures for the complete safety of the English have not been taken.’ The disappearance of Mr. Vincent Stanton under the suspicious circumstances I have alluded to, seems to afford the reply.”）とも伝えた。更に中立とは言いながら、マカオ港にたえず中国軍艦が停泊していたり、マカオ市街地でないにせよ、郊外には大勢の中国兵士が駐屯しているのも事実である、と暗に中国寄りの黙認姿勢までジョンソンはこの機会に批判した。

事件発生直後に外交関係者の間で交換される第一報は、急場の興奮のなかで書かれて

いる性格のためであろうが、日頃の憶測や不満に基づいた言いがかりのような文章に走りがちであるから、いつも後年の歴史研究に於いて、興味深い資料を提供するものらしい。このジョンソン書簡の場合もそうである。英人のマカオ居住はあくまでも法的根拠のない黙認であって、中国政府の公示による退去の方針が出ている以上、「割り込み組」の英人を保護する立場にマカオ総督は置かれていない。ポルトガル系のマカオ市民自体が、前述したように主権のない「居座り組」にすぎず、中国軍艦の入港や中国兵士の駐屯を拒める立場にない。

これらの点についてポルトガル側の立場からの見解を述べたピント総督によるジョンソン宛回答書が、英語に翻訳されて英国公文書館に保存されている。長い引用になるけれども判読したテキストを文末に掲載する。すでに本稿で見てきたようにポルトガル商人のマカオ形成以来、主権者の中国、「居座り組」、「割り込み組」の三者の関係をどのように改善しようとしても限界のあること、肥大化する英国商人の利害を守るための方策はマカオにあらずして、香港の軍事占拠に訴えた英国政府の治外法権の導入によって実現するほかない、というジャーディン・マセソン商会等の要請は、再び大きく歯車を回転させて、時代が分水嶺にさしかかっていること、以上の二点がこのテキストにも如実に現れている。

Appendix:

To The Most Illustrious Sir A.R.Johnson, Deputy Superintendent &c. &c.

Macao, 10th August 1840

The Undersigned, Governor of Macao and its Dependencies, has the honor to inform the Deputy Superintendent of the Trade of British Subjects in China, that He has just been verbally notified by Captain Smith, Senior Officers of the Naval Forces in these Seas, that, if the missing British subject Mr. Stanton, is not produced within a certain period of time by the Chinese Authorities, He will cause two of the Ships under his command to move into the Inner Harbour of Macao: And, although such a notification has been answered as was becoming the dignity of the Representative of Her Most Faithful Majesty in this place, and its Governor, The Undersigned hopes, according to the Law of Nations, to receive this notification by writing, in order that He may give it a written answer in self vindication, and for the Knowledge of all the World. The Undersigned has to acquaint The Deputy Superintendent beforehand, that the He will consider this step (should it by chance be taken) as an act of determined hostility; and, whilst more ample Protests are not put forward, He now protests most formally and solemnly against you, and against all whom it may concern.

アヘン戦争前夜のマカオに於ける英人居住についての考察

As you have quoted the 3rd Article of the Treaty between His Britannic Majesty and His Most Faithful Majesty, signed at Vienna on the 22nd January 1815, the opportunity is arrived (in order to avoid for the future a recourse to forced interpretations), to tell The Deputy Superintendent that if by this Article the Treaty of 1810 was annulled, we also find therein the following: “without prejudice, however, to the ancient Treaties of Alliance, Friendship, and Guarantee, which we have so long and so happily subsisted between the two Crowns, and which are hereby renewed by The High Contracting Parties, and acknowledged to be of full force and effect.” By all these Treaties the subjects of your Nation are prohibited to trade, and even to continue residence in this City; and the entrance of any Ship into the Inner Harbour is entirely interdicted, there having been no other instance than that of the “Hyacinth” which was sent in by the same Acting Senior Officer, and concerning which this Governor behaved as is publicly known.... The Undersigned feels that He must not fail to warn The Deputy Superintendent against so hostile and so impolitic a measure, making you at the same time sensible that for the evils, which are going to follow, are only to be held answerable those who shall assist in them.

The Undersigned, however, does not fail to offer you again the assurance of His most perfect consideration.

(Signed) A.A. de Silveira Pinto

Reference:

Public Record Office, Kew Gardens: FO/697/1, FO/697/2, FO/610/2
ADM/51/3230, ADM/53/681.

SOAS Library, Univ. of London: Robert Morrison Collection.

Memoirs of the Life and Labours of Robert Morrison, compiled by his wife, in 2 vols, (Longman, London, 1839).

Andres C. West: Catalogue of the Morrison Collection of Chinese Books, (SOAS, Univ. of London, 1998).

C.R.Boxter: Fidalgos in the Far East, 1550-1770, (Martunus Nijhoff, The Hague, 1948).

The Embassy of Captain Goncalo de Siqueira de Souza to Japan in 1644-7, (Limited edition, Macau, 1938).

The Great Ship from Amacon, Annals of Macao and the Old Japn Trade, 1555-1640, (Centro de Estudos Historicos Ultramarinos, Lisboa, 1959).

The Tragic History of the Sea, 1589-1622, (Hakluyt Society, Cambridge Univ., 1959).

The Dutch Seaborne Empire, 1600-1800, (Hutchinson, London, 1966).

Austin Coats: Myself a Mandarin, (Oxford Univ. Press, Hong Kong, 1968).

- Macao and the British, 1637-1842, Prelude to Hongkong, (Oxford Univ. Press, Hong Kong, 1988).
- City of Broken Promises, (Oxford Univ. Press, Hong Kong, 1995).
- A Macao Narrative, (Oxford Univ. Press, Hong Kong, 1999).
- Maurice Collis: The Grand Peregrination, (Faber, London, 1949).
- The Great Within, (Faber, London, 1946).
- Cortes and Montezuma, (Robin Clark, London, 1994).
- Frederick Charles Danvers: The Portugues in India, in 2 vols, (Asia Educational Service, New Delhi, 1992).
- A. Ljungstedt: A Historical Sketch of the Portuguese Settlements in China, (Viking, Hong Kong, 1992, reprint edition of 1836).
- Donald Pittis and Susan Henders: Macao, (Oxford Univ. Press, Hong Kong, 1997).
- Rosmarie Wank-Nolasco Lamas: History of Macu, (Institute of Tourism Education, Macau, 1998).